

ジェンダーの観点からみる 第二次世界大戦後の皇室イメージ戦略

2007年度個人研究員

小檜山 ルイ
Rui Kohiyama



本研究は、「民主主義に開かれた皇室」という第二次世界大戦後の皇室イメージ作りに、皇室に関わる女性たち、皇室をめぐるジェンダー関係がどのように利用されたかを明らかにすることを目的とした。天皇制を「国体」として国民統合を図り、植民地経営を行おうとしてきた日本が、敗戦後、民主主義をいわば「国体」とするアメリカ合衆国に占領されたとき、天皇制は民主主義に適合的なものと表象される必要があった。その必要はどのように満たされたのかを、ジェンダーの観点から研究しようというわけである。

天皇、皇后や「天皇ご一家」のイコノグラフィーの研究は、これまで主に表象文化論の分野で研究されており、若桑みどり『皇后の肖像』（筑摩書房、2001年）、川村邦光『聖戦のイコノグラフィー』（青弓社、2007年）、北原恵『「天皇ご一家」の表象』（東京大学大学院総合文化研究科超域文化科学専攻提出博士論文、2004年）などがある。また、吉見俊哉も「戦後天皇制とアメリカニズムにおけるジェンダー表象」をテーマとする研究を展開中のようにある（お茶の水女子大学〈ジェンダー研究のフロンティア〉のシンポジウム／プロジェクトD：理論構築と文化表象「ジェンダー研究の理論と表象分析のいまー国家・資本・表象の共謀と攻防」報告〈<http://seijotcp.hp.infoseek.co.jp/text/genderd.htm>〉2008年3月10日）。

本研究では、表象も扱うが、よりオーソドックスな歴史学的研究手法を取り入れて、課題に取り組む。研究は、現在萌芽的な段階にあり、2007年度は、1946年から4年間、当時の皇太子の家庭教師を務めたエリザベス・グレイ・ヴァイニングに関する情報と資料収集に取り組んだ。

「ヴァイニング夫人」は、クエーカーの、40代後半の未亡人で、第二次世界大戦直後に「アメリカ・フレンズ奉仕委員会（American Friends Service Committee）」で働いていたところ、天皇家の家庭教師に抜擢され、来日、当時12歳だった皇太子明仁に学習院の英語の授業で「ジミー」という名を与えたことは良く知られている。アメリカ人の女性家庭教師をつけることで、皇室は「アメリカの支配」を受け入れる恭順の姿勢を明確に、しかし、一見屈辱的でない形で示した。アメリカに帰国後の1952年、ヴァイニングは、*A Little Window for the Crown Prince*（『皇太子の窓』）として、後に平民正田美智子との婚姻の際、影響力をふるった小泉信三が翻訳）を出版し、日本での経験を明らかにした。そこに描かれた日本と皇室が、優美な伝統を保持する穏やかで平和的な家族／共同体として描かれていたのは言うまでもない。ヴァイニングは帰国後も皇太子と音信を保ったことも広く知られており、正田美智子との結婚式に唯一の外国人として招かれた。1999年にヴァイニングが亡くなったときには、日本でもアメリカでも、過去のエピソードとして、小規模な報道が成された。

本年度の調査では、あまり知られていない、エリザベス・グレイ・ヴァイニングの来日前の経歴に主に焦点を置いた。ヴァイニングは、1902年、フィラデルフィアのジャーマンタウンで、ジョン・ゴードン・グレイとアン・ムーア・アリザード・グレイの娘として生まれ、ジャーマンタウン・フレンズ学校（クエーカーの学校）を経て、1923年にプリンマー

大学を卒業した。児童文学の作家を目指しながら、教職についた後に、図書館司書の資格を取得し、1926年にノース・キャロライナ大学のチャペル・ヒル校地の図書館員となり、同じく大学で働いていた、モーガン・フィッシャー・ヴァイニングと結婚した。1933年に交通事故で夫を亡くし、ジャーマンタウンに戻って、監督派からクエーカーに転じたのである。

この間、ヴァイニングは、1927年頃より、児童文学作家として作品を発表していた。特に、1942年にエリザベス・ジャンネット・グレイの名で発表した *Adam of the Road* は13世紀の英国を舞台に少年の冒険を描いたものであるが、1943年に児童文学の優秀作品に送られるニューベリー・メダルを受賞している。来日時のヴァイニングは公に認められた児童文学作家だったのである。ヴァイニングの作品の主なものは、以下に挙げる通りであり、2007年度には、*印のついたものを入手した。

Meredith's Ann (1927)

Tangle Garden (1928) *

Meggy MacIntosh (1930)

Jane Hope (1933)

Young Walter Scott (1935) *

Beppy Marlowe (1936)

Penn (1938) *

Contributions of the Quakers (1939)

The Fair Adventure (1940)

Adam of the Road (1942)

Sandy (1945) *

Windows for the Crown Prince (1952) *

The Virginia Exiles (1955) *

Friend of Life - A Biography of Rufus M. Jones (1958) *

The Cheerful Heart (1959)

Return to Japan (1960) *

I Will Adventure (1962)

Take Heed of Loving Me (1963) *

Flora: A Biography (1966) *

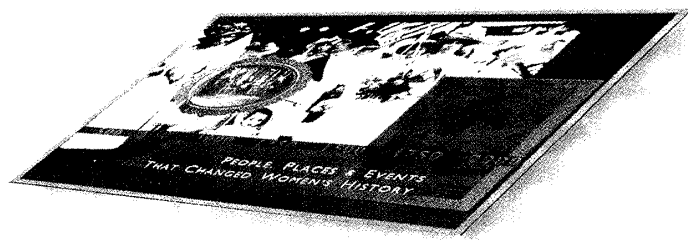
I, Roberta (1967)

Quiet Pilgrimage (1970) *

The Taken Girl (1972) *

Being Seventy - The Measure of a Year (1978) *

Harnessing Pegasus: Inspiration and Meditation (1978)



収集できた作品は来日後のものに偏っているので、今後は来日以前の作品の収集に努め、児童文学作家としてのヴァイニングの全容を明らかにするとともに、クエーカーとしてのヴァイニングについても検討を加える予定である。さらに、ヴァイニングの日本との関わりが、日米でどのように報道されたかについても検討を進めたい。こうした作業を通じて、「皇太子の家庭教師」という、ヴァイニングの日本への介入の仕方が、アメリカの伝統的なアジアへのアプローチの型—宣教師的接近—をふまえつつ、これを変型したものであることを明らかにしていく。